

---

# 俺は何か変わった？

上谷博

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺は何か変わった？

### 【Nコード】

N3871D

### 【作者名】

上谷博

### 【あらすじ】

自分は何も変わっていないと感じ、焦っているある高校生のお話。

## 第1話（前書き）

駄文です。

読むに耐えないかもしれませんが、その時は読むのをやめてく  
れてかまいません。

## 第1話

最近なんだか憂鬱だ。

中学卒業して、高校に入学して、みんなはめまぐるしく変わっていつて、俺は何も変わってない……。

世の中便利になったもんで、ブログとかプロフとかで簡単に会わなくなった友人や、元クラスメイトなんかの動向が、分かるようになった。

ただ、やはり、人間良いことばかりとは限らない。

ほとんどは、上手く行っていたり、まあ、俺のように無難に、平凡に過ごしている。

ただ、ぐれてタバコを吸う様になったり、自殺したいとほざいたりする奴もいる。

大抵、小学校、中学校の時は真面目で、不良とは対極にいた奴だ。人間、どうしてそういう風になってしまっただろう……。

まあ、悪いことばかりではなくても、みんな、何かしら変わっている。

恋人を作ったり、何か新しいことをはじめたり。

友人の一人は弓道部に入って、弓矢を引いている。

無論、何であいつが？って奴だ。

しかし、俺はどうだろうか？

何か変わっただろうか？

答えはN。だ。

中学、いや小学校のころから何も変わっていない。

体は成長したけど、なにも……。

変化についていけないんだ……。

俺の名前は黒田忠明。

高校1年生だ。

俺の平日の朝は起きて学校に行き、50分授業を7時間受けて帰宅する。

家から学校までは電車で30分。

その間に本を読む。

最近は村上春樹さんの本にはまっている。

読みやすいんだけど、書いていることの奥が深い。

その後塾行ったり、家でゴロゴロしたりしている。

休日は、午前中はずっと寝てる。

で午後からおきて、土曜日は塾、日曜日は、まあ、ゴロゴロしている。

こんな、おおよそ、単調な生活をしている。

だから、さっきみたいな下らないことを考えてしまっのかもしれない。

## 第1話（後書き）

勢いで書いてしまいました。

続きをどうしようか、思案中です。

恋愛物にしようか、純文学でいこうか・・・。  
迷うな・・・。

## 第2話

千里に再会したのも、そんなことを思っているときのことだった。彼女は僕の幼稚園、小学校、中学校とずっと一緒の、まあ幼馴染といてもいいだろう。

まあ、みんなが思うような幼馴染ほど、よく話すわけでもないけど・・・。

ベターな物語みただけど、僕の初恋の人でもある。

今でも好きだ。

彼女は、都立の進学校に行ってしまったって、高校も一緒とは行かなかった。

僕は先生ウケが悪くて、私立じゃないと、ロクな高校に行けなかった。

彼女が行きたいといっていた高校には、試験で平均80点くらいとらないと・・・、と担任に言われていた。

まあ、都の共通問題とはいえ、さすがに僕の頭では無理だった。

また挑戦する根性もなかった。

6

再会は、よく考えれば、

テスト前で珍しく塾の自習室ではなく、図書館で勉強するという、気まぐれを起こしたからだだった。

彼女は見慣れない制服を着て、熱心に勉強していた。

悪い気がして話しかけたくなかったんだけど、彼女の前の席しか空いていなかったから、そこに座るしかなかった。

座って、30分くらいたってからだろうか？

「忠明・・・？」

と彼女が言ってきた。

「おせえよ。」

まったく、よく集中力が続くもんだ。

「かなり久しぶりじゃない？今日何時までいるの？」

「終わりまでいるつもりだよ。千里は？」

「私も。一緒に帰らない？」

「ああ。いいよ。」

それからただひたすら、勉強するのみだ。

彼女の前だから手を抜くわけにもいかず……。

いつも図書館だと、漫画読んだりしちゃうから、嫌なんだけど、自習室並みに集中できた。

で、閉館。

彼女とは、家の方向が違うんだけど、夜道を一人で帰すものこの「時勢、物騒だ。」

家まで送ってくことにした。

僕の家は、図書館の前の通り。

「じゃあ、また今度。」

僕の家の前を通った時、彼女がそう言った。

「いや、送っていくよ。物騒だからな。」

「ほんと？じゃあ、お願いね。」

「まあ、お前襲う物好きもいないだろうけどな……。」

つい、皮肉が口を出る。

正直、彼女は可愛い方に分類される。

中学時代も結構モテた。

だから、僕の台詞は間違いなんだけど。

すかさず彼女も

「忠明の腕力で守れるかどうか……。逆に私にもまられたりしないだね！！」

「さすがにそこまではいかねえよ。」

まあ、僕は体育の成績万年2。

3すらとったことない。

「でも、体育の成績2だったじゃない。」

「よくそんなこと覚えてるな……。」

「だって、忠明くらいだよ。中学の時成績2だったの。」  
「うっ……。言われてみればそうだ……。」

「水泳できるのに何で、陸に上がるとダメなの？ペンギンみたいよね。水中だと速いけど、陸に上がると……。まあ、足の速さはそこそただけだね。球技は……。」

僕は球技はダメだ。

ボールがパスされても上手くキャッチできないんだよね。

「お前、下らないことほんとよく覚えてるよな。」

「長い付き合いなんだから、それくらい覚えるわよ。ずーっと、そこんところ変わらないんだから。」

「だよな……。みんな色々と変わってっってるのにな。」

先述のことを思い出して、また少し考えてしまう。

「どうしたの、急に……？」

自分の世界に、入り込む一歩手前で、現実世界に引きもどされた。

「いや、色々と思うところがあつてさ。」

僕は、先述のことを話した。

「忠明らしくない、悩みだね……。そんなことで悩むとは思わなかった。」

「そう？僕は昔から哲学者肌じゃん？」

彼女は笑いながら

「いやいや、そんなことで悩む時点で、昔と変わってるよ。下らないことで悩みすぎ。じゃあ、送ってくれてありがとね。」

「あっ、ああ。またな。」

気づいたら、もう彼女の家だ。

気づかぬうちに、集中していたようだ。

「あれ、気づいてなかったの？まったく、もう……。そんなこと悩んでる割には抜けてるのね。」

笑いながら言われてしまった……。

「まあ、おばさんによるしかな。」

「うん。じゃあ。」

彼女は家に入ってた。

少し気持ちが楽に明るくなっていた。

さあ、かえってもう一頑張りするかな。

## 第2話（後書き）

千里は僕の初恋の人をモデルにしました。

彼女は高校で彼氏を作ってしまったが・・・。

ふたりはどうなるんでしょうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3871d/>

---

俺は何か変わった？

2010年11月26日14時49分発行